

『シラ書』における「知恵」

— アレクサンドリアのクレメンスとパウロの神学に照らして —

秋 山 学

序. 『シラ書』をめぐって

『シラ書』（『集会の書』『ベン・シラの知恵』）は、旧約聖書第二正典¹の一書であり、正典書である『箴言』、あるいは同じく第二正典の一書である『知恵の書』（『ソロモンの知恵』）とともに、旧約聖書のうち「知恵文学」と呼ばれるジャンルに分類される。これら『箴言』『シラ書』『知恵の書』は、おそらくこの順序で、『箴言』が前3世紀ごろに編集され²、『シラ書』は前2世紀³、『知恵の書』は前1世紀に成立したと考えられる⁴。これら3作品に共通するテーマである「知恵」をめぐっては、3書の間になんぞと相違と発展が認められる。

本稿で中心に考察する『シラ書』のヘブライ語原本は、ほぼ紀元前190年ごろに執筆されたと考えられる。原著者の名は「序文」の7節において「イエス」と記されており、エルサレムで知恵の教師をしていた人物である。その孫が「エウエルゲテス王の治世の第38年に」（序文27節）エジプトにやって来て、この著作をギリシア語に翻訳した⁵。この「エウエルゲテス王」とは、プトレマイオスVII世エウエルゲテス・フィスコス王とされ、治世が前170年から116年であったことから、訳者は前132年に本書をヘブライ語からギリシア語に訳出したことになる。孫と祖父の年齢差を勘案して、原著は前190年ごろの成立であろうと考えられる。一方、この作品の末尾に附録として置かれている第51章は「シラの子イエスの祈り」と題されているため、この書物は正確には「シラの子イエスの書」となるが、慣例上『シラ書』と呼ばれ、「シラの子」を意味するヘブライ語から「ベン・シラ」の書、あるいは「ベン・シラの知恵」とも呼ばれる。また、キリスト教会で主にカテケジス（教理教育）のために用いられるようになった経緯から、古ラテン語訳以降『集会の書』という名称を有する。

アレクサンドロス大王（前356—323）がイッソスの戦（前333年）およびアルベラの戦（前331年）という二度の決戦においてペルシア王ダレイオ

ス三世を破ったことにより、パレスティナ地方はギリシア勢力の支配下に入った。アレクサンドロスの死（前323年）の後、その帝国は三分割され、いわゆる「後継者」（ディアドコイ）の時代に入る（前319－287）。ユダヤ地方は当初プトレマイオス王朝の支配するエジプトに属したが⁶、シリアおよびメソポタミア地方はセレウコス朝の支配下に入った⁷。前198年に行われたパネイオンの戦において、セレウコス朝のアンティオコス三世がプトレマイオス朝の将軍スコパスを破り、パレスティナはそれ以降、シリアの支配下に入ることになる。この間の経緯は、第1次から第5次におよぶ「シリア戦争」として伝えられ⁸、聖書文書中では『ダニエル書』11章のうちに暗示されている。こうして、バビロン捕囚からのペルシアによる解放（前538年）の後、ペルシアによる比較的寛容な宗教政策の下にあったパレスティナ地方は、セレウコスIV世フィロパトル（前187－175）、そしてアンティオコスIV世エピファネス（前175－164）の治世に至り、ヘレニズムの方策からユダヤ教に対して迫害を加えるセレウコス朝のもとに置かれることになった。

さて、この『シラ書』の末尾（第50章）において詳細に記されている大祭司シモンとは、前218年から192年にかけて⁹（あるいは前227年から198年¹⁰、また前225から195年にかけて¹¹）、大祭司の地位にあった人物、シモン二世と考えられている。先の迫害とは、上述の大祭司シモン二世の子オニアス三世（前198－170）が職を退いた直後に始まったものであり、本書には、上述したアンティオコス・エピファネスIV世によるユダヤ人迫害への言及がまったくないことから、この迫害に先立つ頃、本書はすでに完成していたと思われる。なおこの迫害に対し、マタティアスを初めとするユダヤ人の独立抵抗運動が前166年から135年にわたって行われ、その結果ユダヤは、後にローマによって制圧されるまでの間、一時的に独立することになる（ハスモン朝、前141－63年）¹²。『シラ書』は、先の激しい迫害の以前に記されたものと考えられ、また翻訳者も既にエジプトに移住し、この迫害を直接被るような状況にはなかったと思われる。

『シラ書』が教会において「正典」の一部として、すなわち「第二正典」として認められてきたことは冒頭に述べたが、伝承上「正典」とされたテキストは、「七十人訳聖書」（セプトゥアギンタ；LXX）に含まれるギリシア語本文であった。したがって19世紀以降、この『シラ書』のヘブライ語原典が発見された際にも、その原典テキストが正典とされるには至らなかった。その発見の経緯とは、1896年にカイロのゲニザ（廃本貯蔵室）において、11/12世紀に筆写

された5つの断片部分が見つかり、その後クムランで1946年に、またマサダでは1964年にそれぞれヘブライ語テキストの一部が発見されるというものであった。だがこれらのヘブライ語テキストを合わせても、ギリシア語テキストの3分の2ほどの長さにはかならない。一方、ラテン教父ヒエロニウムス(340—420)によるラテン語ウルガータ訳聖書では、すでに2世紀に完成していたとされる古ラテン語訳がそのまま採用された。この古ラテン語訳聖書は、ギリシア語訳から重訳されたものと推定されるが、現行の七十人訳聖書には見られないテキストを多数本文に含んでいるため、おそらく初期キリスト教会における注記が本文に紛れ込んでいると考えられる。それと同時に、初期キリスト教会において、この書物が倫理的勧告の書として好まれた痕跡を知ることができ、またこの書物が『集会の書』という別名を有する経緯も推察される。

いま七〇人訳と、ウルガータ訳の各章の長さの相違を以下に記してみよう。順に、章番号：セプトゥアギンタの節数—ウルガータの節数、である。

1: 30—40 2: 18—23 3: 31—34 4: 31—36 5: 15—18 6: 37—37 7: 36—40
8: 19—22 9: 18—25 10: 31—34 11: 34—36 12: 18—19 13: 26—32
14: 27—27 15: 20—22 16: 30—31 17: 32—31 18: 33—33 19: 30—28
20: 32—33 21: 28—31 22: 27—33 23: 28—38 24: 34—47
25: 26—36 26: 29—28 27: 30—33 28: 26—30 29: 28—35 30: 25—27
31: 31—42 32: 24—28 33: 33—33 34: 31—31 35: 26—26 36: 31—28
37: 31—34 38: 34—39 39: 35—41 40: 30—32 41: 22—28 42: 25—26
43: 33—37 44: 23—27 45: 26—31 46: 20—23 47: 25—31 48: 25—28
49: 16—19 50: 29—31 51: 30—38

上表から、セプトゥアギンタに比してラテン語訳聖書の節数が総じて大きいことが理解されよう。このことから、ラテン語ウルガータ訳における『シラ書』が、随所に書き入れ注記文を含んでいるであろうことは容易に推察される。このような背景を有する『シラ書』に関しては、教会で「正典」として公認されたのがギリシア語テキストであるということとも連動して、その本文校訂の上で、セプトゥアギンタ研究に携わる者に、最大の難問を突きつけるとされる¹³。

1. アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』における『シラ書』からの引用

さて、本稿で以下、主に参照する初期ギリシア教父の一人、アレクサンドリアのクレメンス（後 150 – 215）は、著作の一つである『パイダゴゴス』（Paedagogus, 『訓導者』）において、『シラ書』を頻繁に引用することで知られる¹⁴。これも、上述のような教会での集会—クレメンスの場合にはおそらく「ディダスカレイオン」—において、この『シラ書』がテキストとして用いられたであろうことを物語る。彼による引用テキストは、現在標準版とされるセプトゥアギンタのうち、長ヴァージョンのものにはほぼ一致するが¹⁵、短ヴァージョンには一致しない。一方、初期キリスト教会という場に関して、上記の古ラテン語訳テキストとの関連性について論じることは可能であろうが、テキスト伝承をめぐる真相は謎に包まれたままである。

クレメンスは、主たる著作を 3 作遺している。それは『プロトレプティコス』（『ギリシア人への勧告』）、『パイダゴゴス』（『訓導者』）、そして『ストロマティス』（『論考集成』）であるが、そのうち『パイダゴゴス』における『シラ書』からの引用の多さが注目される。その頻度は他の教父たちに比して著しい。このクレメンスによれば、「訓導者」の役割とは、受洗後の信徒に対し、さらにキリスト教徒に相応しい生活を送らせることにあるとされる。彼の主要 3 作品に関しては、『プロトレプティコス』で異教徒からキリスト教徒への入信を勧告する一方、『ストロマティス』では、理想のキリスト者が「覚知者」（gnóstikos）と規定され、この「覚知者」の境地が描き出される。その中間に置かれる『パイダゴゴス』では、新たに入信した信徒が、キリスト教徒に適わしい生活を送れるよう、数々の勧告が行われてゆく。その際、記述の指針となっているのがこの『シラ書』なのである。

ではまずクレメンスの『パイダゴゴス』の全体構造をつかみ、その後『シラ書』との関連を探ることにしよう。以下に『パイダゴゴス』全 3 巻に関して、各巻を構成する章ごとの見出しを掲げ、吟味に入ることにする。

第 1 巻

- I. 訓導者はいかなる福音を伝えるか。
- II. 訓導者はわれわれの過ちを通して導くこと。
- III. 訓導者は人間愛に満ちていること。

- IV. ロゴスは男女に等しく訓導者であること。
- V. 真理に与かるものはすべて神における子供であること。
- VI. 「子供」や「幼児」という呼び名が、初等教育課程のあり方を表している
と考える人々を反駁する。
- VII. 訓導者とは何者であるか、そして彼の教育 (paidagógia) とは何か。
- VIII. 義が善であるとは限らないと考える人々に対して。
- IX. 善行をなすことと懲らしめを与えることは同一の力に属し、そのうち
に、御言葉の訓育の何たるかが示されること。
- X. 同一の神が同一のロゴスを通し、論して罪を遠ざけ、人間性に勧告して
救うこと。
- XI. 御言葉は律法と預言者たちを通して訓育すること。
- XII. 訓導者は父のあり方にも比すべく、厳しさと優しさをを用いること。
- XIII. 正しき生き方は正しきロゴスに基づき、逆に過ちはロゴスに反して生ず
ること。

第2巻

- I. 食物に関してはいかにあるべきか。
- II. 飲み物に関してはいかに振る舞うべきか。
- III. 調度の華美に熱を上げるべきではないこと。
- IV. 饗宴にはいかに与かるべきか。
- V. 笑いについて。
- VI. 猥雑な言説について。
- VII. ともにつましく生きようとする人が守るべきことどもについて。
- VIII. 香油や花冠を用いるべきかどうか。
- IX. 眠りはいかにとるべきか。
- X. 子孫を残すことに関して守るべきこと。
- XI. 履物について。
- XII. 石と金の飾りに囚われてはならないこと。

第3巻

- I. 真なる美について。
- II. 化粧をすべきではないことについて。
- III. 化粧をする男どもに対して。

- IV. 誰のために時間を割くべきか。
- V 水浴はいかになすべきか。
- VI. キリスト教徒のみが富めることに関して。
- VII. キリスト教徒にとって慎ましきは善き伴侶であること。
- VIII. 像と範例とは正しき教えの最大の部分であること。
- IX. 水浴をすることの意義について。
- X. ロゴスに従って生きる者にとって、肉体の鍛練は勧められるべきこと。
- XI. 最良の生活に関する概説。
〔細目：外套 耳輪 指輪 頭髮 顔の化粧 散歩 模範的処女 歓楽
と仲間 公的見世物 通常の生活における宗教
教会の外で 愛と慈しみの接吻 目の統御〕
- XII. 同じく最良の生活に関する概説；聖書において、キリスト教徒の生活を特徴づけていることどもについて。

上記の表のうち、『シラ書』からの引用が見出される部分に関して、その章に『シラ書』からの引用箇所を順に付してゆくと、次のような次第となる（なお典拠表示については、聖書の箇所は章・節を「,」で区切り、クレメンスの箇所は巻・章・節を「.」で区切るとともに、両者を「:」で対置した）。

第1巻

- VIII. 義が善であるとは限らないと考える人々に対して。
21,6 : 1.62.1 22,6-7 : 1.66.3 22,8 : 1.66.3 34,13 (14) : 1.67.2
1,21-22 : 1.68.3 1,18 : 1.69.2 16,13 : 1.71.3 16,12-13 : 1.72.1
- IX. 善行をなすことと懲らしめを与えることは同一の力に属し、そのうちに、御言葉の訓育の何たるかが示されること。
7,23-24 : 1.75.2 32,17 : 1.79.4 18,13-14 : 1.81.3 16,10 : 1.81.3
16,12 : 1.81.3 30,8 : 1.87.1
- XI. 御言葉は律法と預言者たちを通して訓育すること。
1,1 : 1.97.3
- XIII. 正しき生き方は正しきロゴスに基づき、逆に過ちはロゴスに反して生ずること。
33,6 : 1.102.1

第2巻

- I. 食物に関してはいかにあるべきか。
18,32 : 2.8.2
- II. 飲み物に関してはいかに振る舞うべきか。
31,29-30 : 2.24.3 31,26 : 2.26.3 31,25 : 2.32.1 26,8 : 2.33.2
31,27-28 : 2.23.3 31,20 : 2.34.3 31,19 : 2.34.4
- IV. 饗宴にはいかに与かるべきか。
39,15;18 : 2.44.2
- V. 笑いについて。
21,20 : 2.46.3
- VI. 猥雑な言説について。
20,5 : 2.52.4 20,8 : 2.52.4
- VII. ともにつましく生きようとする人が守るべきことどもについて。
31,31 : 2.53.1 14,1 : 2.53.4 9,9 : 2.54.1 31,16-18 : 2.55.2 32,11 :
2.56.1 32,3.7-8 : 2.58.2 11,8 : 2.58.3 9,18 : 2.59.3 7,14 : 2.59.3
- VIII. 香油や花冠を用いるべきかどうか。
38,7 : 2.69.2 39,13-14 : 2.76.3 39,26-27 : 2.76.5
- X. 子孫を残すことに関して守るべきこと。
26,22 : 2.98.2 23,5-6 : 2.93.3 23,18 : 2.99.3 23,19 : 2.99.4
18,30 : 2.101.2 19,2-3 : 2.101.3 19,5 : 2.101.3 38,1-2 : 2.102.1
11,4 : 2.109.3

第3巻

- II. 化粧をすべきではないことについて。
25,6 : 3.17.1
- III. 化粧をする男どもに対して。
19,29-30 : 3.23.4 9,7 : 3.28.2 9,16 : 3.29.1 11,29 : 3.29.1
- VII. キリスト教徒にとって慎ましきは善き伴侶であること。
21,21 : 3.58.2 26,9 : 3.70.4 9,8 : 3.83.4

この表から、クレメンスがキリスト教入信者の実践的規律として『シラ書』を活用していたことがうかがわれよう。また以上の結果から判るのは、クレメ

ンスが『パイダゴゴス』の第2・第3巻に見られるような、具体的な生活上の留意点に関して『シラ書』を参照しているのみならず、第1巻における包括的神学の指針としても『シラ書』を頻繁に引用し、『パイダゴゴス』を記述するために援用しているという点である¹⁶。

2. 『シラ書』の内容とクレメンス

次に、『シラ書』の全体構造を「フランシスコ会訳聖書」の項目分けを参考にして提示すると以下ようになる。

訳者の序 1 - 35

第1部 格言集

①知恵の本性 1,1 - 16,23

知恵の奥義 主に対する畏敬 忍耐と自制 知恵と誠実 試練についての心得
父母に対する務め 謙遜 高慢 施し 教育する知恵

正しい振舞い 富と自惚れ 知者の言葉 真の友情 知恵の賜物 道徳的・社会的戒め 友人と家族 祭司に対する尊敬 貧しい者と悲しむ者 賢明と配慮
女性について 人間関係 政治家 高慢について 真の誉れ 謙遜と真実 外見で判断するな 神への信頼 死の価値 友の選択 善行について 真の友
高慢な金持ちに用心 権力者を信頼するな 金持ちと貧しい人 真の喜び 嫉妬と貪欲 富の善用 知恵の恵み 善人の報い 人間の自由 悪人に対する呪い 確かな報い

②神とその被造物 16,24 - 23,27

創造の業と知恵 人間に対する神の恵み 契約と律法 神の裁き 神への立ち返り 神の偉大さ 贈り物の心得 先見の明 自制 多弁の危険 友への忠告
真の知恵 戒めについて 沈黙は金 逆説的教え 舌を慎め 偽り 知恵の益 罪の回避 知者と愚者 怠惰 子供の墮落 愚か者の墮落 友情 祈り 誓い
淫らな話 肉欲 不貞な女

③知恵と律法 24,1 - 32,13

知恵の称讃 知恵と律法 良い夫と悪い夫 悪い女 幸いな夫 悪女 良い妻
悲しむべきこと 商売の危険 人と言葉 義の追求 秘密を守ること 偽善と二枚舌 ゆるしい口 口争い 悪口 口を慎むこと 貸し付け 施し 保証
もてなし 子弟の教育 健康 喜び 富についての心得 宴会での作法 飲酒

祝宴のときの作法

④社会と道徳 32,14 — 42,14

神への畏敬 さまざまな状態 家と財産 奴隷 夢の空しさ 旅の益 神を畏れる者 真の宗教 律法といけにえ イスラエルの民の救いの祈り 分別 女の選択 友人 助言者 知恵 節制 病と医者 喪の悲しみ 職人 学者に対する称讃 神とその御業の讃美 人間の惨めさ 悪と善 最高の善 物乞い 死 悪人の末路 名声 真の恥と偽りの恥 娘への父の配慮 女を警戒せよ

第2部 神の偉大さ

①自然界における神の偉大さ 42,15 — 43,33

主の業 太陽 月 星 虹 自然現象

②歴史における神の偉大さ 44,1 — 50,29

先祖の称讃 エノク ノア アブラハム イサク ヤコブ モーセ アロン
ピネハス ヨシュア カレブ 士師たち サムエル ナタン ダビデ ソロモン
レハベアム ヤラベアム エリヤ エリシャ ヒゼキヤとイザヤ ヨシヤ
ユダの最後の王たちとエレミヤ エゼキエル 小預言者 ゼルバベルとヨシュア
ネヘミヤ エノク ヨセフ セムとセツ 大祭司シモン 民への戒め 呪われた国々 結び

附録 51,1 — 30 [シラの子イエスの祈り 知恵を求めて]

そこで今度は、この『シラ書』の見出しを基準にしてクレメンスの引用を当てはめてゆくと次のようになる。

①知恵の奥義

1,1 : 1.97.3 <すべての知恵は主より来たり、永遠に主とともにある> (シラ 1,1) ¹⁷。

主に対する畏敬

1,18 : 1.69.2 <主を恐れることは知恵の冠> (シラ 1,18)。

忍耐と自制

1,21-22 : 1.68.3 <というのも、主に対する恐れは過ちを駆逐するが、不正なる者は正しいとされることがない> (シラ 1,21 — 22)。

道徳的・社会的戒め

7,14 : 2.59.3 <長老たちの集いの場では、無駄口をたたくな>。<祈りにおいては、くどくどと言葉を繰り返すな> (シラ 7,14)。

友人と家族

7,23-24 : 1.75.2 <あなたには子供があるか？ 彼らを教育せよ> (シラ 7,23 - 24)。<そして彼らを若き頃から矯めよ。あなたには娘があるか？ 彼女たちの体に心を配れ。彼女たちに、よい顔ばかりしてはならない>。

女性について

9,7 : 3.28.2 <街角に立って辺りを見回すな。また、町の裏通りを歩き回るな> (シラ 9,7)。

9,8 : 3.83.4 <見目麗しい女性から眼を逸らせ。人妻の美しさに見とれるな> (シラ 9,8)。

9,9 : 2.54.1 <既婚女性とは決して同席するな。また、肘をついて彼女と横になるな>。<彼女とともに酒の席に与かるな、あなたの心が彼女に移り、あなたの血が騒いで滅びに至らしめないように> (シラ 9,9)。

人間関係

9,16 : 3.29.1 <正しい人たちと食事をともにし、主を畏れることを、お前の誇りとせよ> (シラ 9,16)。

9,18 : 2.59.3 <口数の多い者は、自分の町で忌み嫌われる> (シラ 9,18)。

外見で判断するな

11,4 : 2.109.3 <身につけている服を誇るな。栄誉を受けるときでも、おごり高ぶるな> (シラ 11,4)。

11,8 : 2.58.3 <あなたが聴く前に、言葉を発してはならない> (シラ 11,8)。

友の選択

11,29 : 3.29.1 <だれかれかまわず家に招き入れるな。悪賢い人間の罠は数多い> (シラ 11,29)。

真の喜び

14,1 : 2.53.4 <口において舌禍を招かない人は幸いである。罪を悔やむ思いに悩まされることがない> (シラ 14,1)。

悪人に対する呪い

16,10 : 1.81.3 <主は、頑なな心を持つ恥知らずな 60 万人の兵士たちを、鞭打ったり、憐れんだり、打ち叩いたり、癒したりしながら、憐れみと教導のうちに守った> (シラ 16,10)。

16,12 : 1.81.3 <憐れみと怒りは、ともに主のものである>。<購う力、怒りを浴びせる力を主は有する。その憐れみが深いように、咎めもまた厳しい> (シラ 16,11 - 12)。

16,12-13 : 1.72.1 <なぜなら、主の憐れみと同様、その難詰もまた大きいのでから> (シラ 16,12)。

16,13 : 1.71.3 <神は人を、その業に照らして裁く> (シラ 16,13)。

②神の偉大さ

18,13-14 : 1.81.3 <主の憐れみはすべての肉に及ぶ。難詰し、教育し、教え諭し、群れを導く牧者のように立ち返らせる。教育を受け容れる者、自らの親しき交わりに尽力する者を憐れむ> (シラ 18,13 - 14)。

自制

18,30 : 2.101.2 <欲情の後を歩むな。欲望から身を遠ざけよ> (シラ 18,30)。

18,32 : 2.8.2 <少しの放縦のために酔いに墮ちるな> (シラ 18,32)。

19,2-3 : 2.101.3 <酒と女は、聡明な者の思慮を奪い、娼婦に溺れる者は、ますます向こう見ずな人間となる。腐敗と蛆虫が彼を嗣業とし、彼はより大きな恥のうちに身をさらす> (シラ 19,2 - 3)。

多弁の危険

19,5 : 2.101.3 <しかるに、快樂に抗する者は、おのれの生に冠を被せる> (シラ 19,5)。

真の知恵

19,29-30 : 3.23.4 <人は、会って見ればわかる。顔をあわせて見れば、その人の人間性がわかる。その人の身なりや足の運び方、笑ったときの歯の見せ方が、その人の品格を告げる> (シラ 19,29 - 30)。

沈黙は金

20,5 : 2.52.4 <賢者は沈黙の姿で見出される。多弁には憎悪が向けられる> (シラ 20,5)。

20,8 : 2.52.4 <言葉を長引かせる者は、自らの靈魂を害う> (シラ 20,8)。

罪の回避

21,6 : 1.62.1 <主を畏れる者は、心において主に立ち返る> (シラ 21,6)。

知者と愚者

21,20 : 2.46.3 <愚か者は笑う際に自らの声を高める> (シラ 21,20)。

21,21 : 3.58.2 <分別ある人にとって、教訓は黄金の飾り> (シラ 21,21)。

子供の墮落

22,6-7 : 1.66.3 <というのも鞭と躰けは、いかなる時にも知恵の業。陶器をつなぎ合わせ、愚か者を教える> (シラ 22,6-7)。

22,8 : 1.66.3 <それは、深き眠りに堕ちた者を呼び覚ます業>。

祈り

23,5-6 : 2.93.3 <あなたの僕たちからむなしき望みを取り除け>、<不適切な欲情をわたしの前から遠ざけよ。腹を満たす欲求と性欲とは、わたしを捉えない> (シラ 23,5 - 6)。

肉欲

23,18 : 2.99.3 <自分の寢床を抜け出す男は、心の中で言う。「誰が見ているものか。周りは暗闇だし、壁がわたしを隠している。誰も見ていない。何を恐れる必要があるか。いと高き方は、わたしの罪など少しも気には留めない」> (シラ 23,18 - 19)。

23,19 : 2.99.4 <彼は知らないのだ。主の目は、太陽よりも一万倍も明るく、人間のすべての歩みを見極め、隠れた部分までも見通すということを> (シラ 23,18 - 19)。

③ 良い夫と悪い夫

25,6 : 3.17.1 <経験の豊かさは老人の冠> (シラ 25,6)。

悪女

26,8:2.33.2 <醜態に陥る妻は、夫の大いなる憤りのもと> (シラ 26,8)。<夫は、彼女の不品行を覆わないから>。

26,9 : 3.70.4 <女性の好色は流し目でわかる> (シラ 26,9)。

良い妻

26,22 : 2.98.2 <遊女は唾をかけられて当然、夫のある女性は、交際する男性にとって死の塔に等しい> (シラ 26,22)。

子弟の教育

30,8 : 1.87.1 <頑なな馬が馴らされないでいると駆け出し、息子は安逸なままに置かれると、放埒に走る> (シラ 30,8)。

宴会での作法

31,16-18 : 2.55.2 <出されたものは人間らしく食べよ。品位よく、最初に食べ終えよ。そして大勢の者と同席する場合は、彼らよりも先に手を伸ばすな> (シラ 31,16 - 18)。

31,19 : 2.34.4 <訓導を受けた人間には酒は十分。彼は自分の寝台で安らかに眠る> (シラ 31,19)。

31,20 : 2.34.3 <食い意地の張った者には、不眠・吐き気・腹痛の苦しみが

伴う> (シラ 31,20)。

飲酒

31,25 : 2.32.1 <酒で男っぷりを上げようとするな。酒は多くの者を台無しにしてきた> (シラ 31,25)。

31,26 : 2.26,3 <かまどの火が鉄を染めて試すように、酒は酩酊において人の心を明らかにする> (シラ 31,26)。

31,27-28 : 2.23.3 <始めからほどよく飲む酒は、霊と心を陽気にする> (シラ 31,28)。

31,29-30 : 2.24.3 <過度の飲酒は、間違いや躓きとなって増幅する> (シラ 31,29 - 30)。

31,31 : 2.53.1 <饗宴の席では、隣人を難詰してはならない。彼に非難の言葉を掛けてはならない> (シラ 31,31)。

祝宴のときの作法

32,3.7-8 : 2.58.2 <年長者よ、宴会の場で語れ。それはあなたに適わしい。だが要点を外さずに語り、知識の正確さを示せ、若者よ> (シラ 32,3;5:7 - 8)。

32,11 : 2.56.1 <時間になったら、グズグズせずに立ち上がり、自分の家に早足で帰れ> (シラ 32,11)。

④神への畏敬

32,17 : 1.79.4 <過てる人間は叱責を拒む> (シラ 32,17)。

33,6 : 1.102.1 <快樂を好む者と姦通者は、交合時の馬> (シラ 33,6), <すべてのものにまたがって嘶く>。

旅の益

34,13 (14) : 1.67.2 <主を恐れる人の霊は生き永らえる。彼らの希望は、彼らを救う者の上にある> (シラ 34,13)。

病と医者

38,1-2;7 : 2.69.2 <医者を尊敬せよ。自らの用のために> (シラ 38,1 - 2 ; 7)。
<いと高き方は医者を創られた。主の許に癒しがある>。<香水屋は混合物を作るがよい>。

神とその御業の讚美

39,13-14 : 2.76.3 <わたしに耳傾けよ、流れのほとりに立つバラのように、若枝を出せ。乳香のように香りを放ち、主の業において主を讚美せよ> (シラ 39,13 - 14)。

39,15.18 : 2.44.2 <歌を唇にのぼせて主に感謝を捧げよ。主の命のうちにすべてのことが適わしく実現し、その救いの業において欠けたる点がないように> (シラ 39,15 ; 18)。

39,26-27 : 2.76.5 <水と火、鉄と小麦粉、乳に蜜、ブドウ酒の血、オリーブ油に衣類。これらはすべて、敬虔な者が善のために用いるべきものである> (シラ 39,26 - 27)。

以上引いた用例から、クレメンスが『シラ書』から引用する場合の傾向は明らかであろう。いま、上に複数例が挙げたものを再度列挙しておくならば「女性について」「人間関係」「外見で判断するな」「悪人に対する呪い」「自制」「沈黙は金」「知者と愚者」「子供の墮落」「肉欲」「悪女」「宴会での作法」「飲酒」「祝宴のときの作法」「神への畏敬」「神とその御業の讃美」といった箇所となる。これらは、日常生活において、キリスト教徒が特に不断の注意を払い、警戒を怠るべきでない項目と言えるだろう。「キリスト教徒のための訓戒集」としてのクレメンスの『パイダゴゴス』は、その基盤を『シラ書』に置いていることが、改めて明らかとなる。クレメンスが『シラ書』を冒頭から読みながら併せて『パイダゴゴス』を記している、というまでには両者の並行性を辿ることはできないが、クレメンスは、キリスト教的生活のためにも、戒律的なものの存在が不可欠であると捉え、それを『パイダゴゴス』において示していると言える。

なお、古ラテン語訳に 44 章以下が元来含まれていなかったことと関連するであろうが、おそらくクレメンスも、上のような引用の次第から、その手にあった写本には『シラ書』の後半部、おそらくほぼ第 40 章以下にあたる部分がなかったものと推測される。

3. 『シラ書』における「知恵」

さて『シラ書』は「知恵文学」を構成する文書の一つであり、この『シラ書』にあっても「神の知恵」がしばしば登場する。もっとも、この『シラ書』の中心思想を一言で取り出すとすれば、それは「主に対する恐れ」であると言えよう。これは「敬神の念」と換言可能である¹⁸。このような「恐れ」の姿勢の重要性について、『シラ書』は、神自らがそれを現出していると考え。つまり『シラ書』にあって、神はしばしば自らの「へりくだり」について明らかにしてい

ると考えることができる。この点は、人に対して、自らが「父」と呼ばれることを神が承諾する次のような箇所に見られている。

「23,1) 主よ、父よ、わが生命の君よ、わたしを見放さず、昏の思い通りにさせたもうな」。

「23,4) 主よ、父よ、わが生命の神よ、わたしに淫らな眼を与えたもうな」。それゆえ、人が他者の過ちを赦すとき、この「父」なる神より人間は赦しを得ることができる。

「28,2) 隣人から受けた不正を赦せ。そうすれば、願い求めるとき、お前の罪は赦される」。

「28,7) 掟を忘れず、隣人に対して怒りを抱くなかれ。いと高き方の契約を忘れず、他人の落ち度には寛容であれ」。

これは、すでに『シラ書』が、新約聖書における「主の祈り」(マタイ 6,9 - 13)における精神を先取りしていることをよく表している¹⁹。

一方『シラ書』のもう一つの特徴として、好んで「知恵」が擬人化されるといふ点を挙げることができよう。それは特に第 14 章 22 節以下において著しい。このような特徴は、バビロン捕囚期以降の聖書記者に共通して見られる傾向であり、すでに『箴言』14 章以下にも表れているが、『シラ書』におけるそれは一層顕著である。知恵は、熱心に追い求められる恋人であり(シラ 14,22 - 24)、保護の手を差し伸べる母ともなり(14,26 - 27)、十分に食物を用意してくれる妻ともなる(15,2 - 3)。

ところで、いわゆる「知恵文学」に分類される書物としては、上に挙げた『箴言』以外にも、『ヨブ記』があり、また他に知恵文学的な要素を秘めたものとして、やはり第二正典に分類される『バルク書』も挙げられよう。これらの書物においてはすでに、知恵が独立した実体、求められるべき価値を持つものとして捉えられている(ヨブ 28; バルク 3,9 - 4,4)。それに対して『箴言』では、すでに知恵が若い女性の姿をもって人格化され、神の啓示を伝える仲介者として現れて人々を導く(箴言 1,20 - 33; 3,16 - 19; 8; 9,1 - 6)。知恵とは、イスラエルとその民を育む存在なのである。また知恵が、いにしえの昔に創られ、創造の業にも参与したことに関しては、先にも引いた『箴言』8,22 - 31によく表されている。そして人を神の許へと導くのは、この「知恵」の業に属するものとされる(箴言 8,31 - 35; 36)。『シラ書』は、この理念を発展させ多様化させている(シラ 4,11 - 19; 14,20 - 15,20)²⁰。

さらにここから一歩進み、『シラ書』第 24 章には、知恵を「至高者の口か

ら出る息吹き」とする発想が語られる。

「いと高き方の御前で集会で知恵は語り、天の万軍を前に誇らかに歌う。

くわたしはいと高き方の口から出て、霧のように大地を覆った。

わたしは高き天に住まいを定め、わたしの座は雲の柱の中にあった>」

(シラ 24,2 - 4)。

こうして知恵とは、天に住まい、創造者たる神が、イスラエルそしてシオンにその住まいを定めるものである (シラ 24,8 - 10)。

『シラ書』よりもさらに後代の作とされる『知恵の書』では、知恵を「息吹」とする上掲のような発想がなお一層著しい。

「知恵は神の力の息吹、
全能者の栄光から発する純粋な輝きであるから、
汚れたものは何一つその中に入り込まない。
知恵は永遠の光の反映、
神の働きを映す曇りのない鏡、
神の善の姿」(知恵 7,25 - 26)。

『知恵の書』には、「知恵を求めるソロモンの祈り」のうちに、知恵を神の「御言葉」とする思想も見られる。

「先祖たちの神、憐れみ深い主よ、あなたは言によってすべてを創り、
知恵によって人を形作った」(知恵 9,1 - 2)。

このような、創造と「知恵」との関係に関しては、すでに『箴言』が「知恵」を「万物に先立って存在するもの」と規定している。

「主は、その道の初めにわたしを創られた。
いにしえの御業になお、先立って」(箴言 8,22)。

もっともこれと同じ発想は『シラ書』にも認められ、それはやはり第 24 章に認められる。

「この世が始まる前にわたしは創られた。わたしは永遠に存続する」(シラ 24,9)。

『知恵の書』に見られるような「御言葉」としての神の知恵という概念が、後に新約思想さらには教父時代において、『ヨハネ福音書』における「ロゴスとしての子・キリスト」に結実してゆくことは言うまでもない。したがって、『箴言』から『シラ書』へ、そして『知恵の書』へという知恵文学上の展開は、新約神学への途上に置かれて差し支えないだろう。すると『シラ書』は、概括

化を恐れずに表現するならば、『知恵の書』よりも一歩旧約的、しかし『箴言』よりも一歩新約寄り、ということになるだろう。『シラ書』の神学は、どのように位置づけるのが最も適切なのであろうか。

ところで、先の『シラ書』24章の23節以下においては、知恵が自らを律法と同一視しているとされてきた。その箇所には次のように記されている。

「23) これらすべては、いと高き神の契約の書、モーセが守るよう命じた律法であり、ヤコブの諸会堂が受け継いだものである」。

しかしながらこの箇所は単に、『シラ書』の著者が、自らの言葉を律法と変わらぬ価値を持つものとした意図を有していたことの証左となるに過ぎない²¹。「知恵」が自らを律法と同化させたという結論をこの一文から導き出すことは、『シラ書』における知恵の働きを、旧約寄りに一歩引き戻す行為であるとは考えられないだろうか。以下、「律法」の内実をめぐる、『シラ書』そのものだけでなく、使徒パウロによる律法理解なども勘案しつつ、考察を続けることにしよう。

4. 「律法」の内実

まず、律法伝承を中心とした旧約聖書編纂の経緯を瞥見しておこう。律法の伝承は捕囚時代の初期、すでに二つのグループにまとめられていた。一つは『申命記』の思想を中心とする『ヨシュア記』以下の歴史文学、もう一つは、エルサレム神殿から出た祭司伝承を資料としたものである。前者の歴史文学の前身には、天地創造からモーシェの死に至る時期の救済史に関して、ヤーウェ伝承およびエロヒム伝承の組み合わせが存在していた。この呼称が用いられるのは、『創世記』の中で神を表すのに、各々がヤーウェ／エロヒムという名を用いているからである。前者Jは最古の伝承、ユダ王国の宮廷の周辺から生まれたもの、後者Eはイスラエル王国から出たものである（サム上9-10章における記述の違いを参照）²²。つまりヤーウェが南伝承（前950頃）、エロヒムが北伝承（前8世紀）ということになる。これに申命記学派D、すなわちエリヤとエリシャの弟子の間に始まった伝承（北起源）が加えられる。これは南の王国に移り、そこでヨシヤ時代（前622年；列王下22,8）に発見された「律法」を書き記した。この律法は拡充され、前400年ごろに現在のかたちを取る²³。最後に、捕囚時代（前586-538年）に、バビロンで始まり、その後バビロンでもエルサレムでも続行された祭司たちの活動〔祭司伝承P〕がある。この

祭司伝承が『創世記』冒頭箇所を書かしめたと言えるのであろう²⁴。なお第二神殿の完成は前515年である。

このように、確かにシナイ山上においてモーセが神から受けたと言われる「契約」は、『出エジプト記』を初めとする「モーセ五書」のかたちで、実質的にユダヤの人々の生活を根底から規定し、「エジプト脱出」以降、捕囚の時期に至るまで生き続けていた。しかしながら、いわゆる「成文法」という形で捉えられるようになるのは、早くともユダ王国における「ヨシヤ王の宗教改革」以降、すなわち前7世紀の末以降であると考えてよかろう。その頃、すでに単立王国となっていたユダは、列強大国の狭間に置かれた弱小国と化していた。さらにこれが明確な「律法」として規定されるようになるのは、正確には捕囚からの帰還以降、すなわち前6世紀末以降と言ってよいだろう²⁵。そこには、純粹な神への恭順を求める「十戒」のような戒律ばかりでなく、実に些細で様々な細目規定が含まれていたことは言うまでもない。

このことから、『シラ書』のような第二正典において「律法」として把握されているのがどのような質のものであったのかについては、いま一度検討する必要があると言えるだろう。『シラ書』における「知恵」は、真に自らを「律法」と同一化させたと言って差し支えないのであろうか。

5. パウロ『ガラテヤ書』における律法理解とクレメンス

ところで、クレメンスが自らの著作のタイトルともした「パイダゴゴス」という語彙に関して、その原ギリシア語はパウロの『ガラテヤ書』3,24および25に現れる。ところがこの『ガラテヤ書』では、律法がキリスト到来までの「訓導者」の役割を果たすものと捉えられている。パウロによれば、キリストは自らの到来により人間を律法の桎梏から解放したとされる。パウロの記述を顧みてみよう。

「3,23) 信仰の到来まで、われわれは律法の下に監視され、閉じ込められて、信仰がいずれ明らかにされるのを待っていた。24) その結果、律法がわれわれにとってキリストへの訓導者となっていた。信仰によってわれわれが義とされるためである。25) しかるに信仰が到来したのだから、われわれはもはや訓導者の下にはいない」。

さらにパウロは、この『ガラテヤ書』に見られる律法理解を『ローマ書』において発展させる²⁶。パウロによれば、律法は人間に対して罪を犯させる原因

にしかなりえない。「律法が入り込んできたのは、罪が増し加わるためであり」(ローマ 5,20), 「律法は怒りを生み出すものでしかなく」(ローマ 4,15), 「律法によっては、罪の認識しか生じない」(ローマ 3,20) のである。また、パウロの影響を受けた文書の一つとされる『ヘブライ書』では、「律法は、来たるべき善き事どもの影を有するに過ぎない」(ヘブライ 10,1) とされている。

クレメンスにあっては、『ガラテヤ書』におけるような「律法かキリストか」といった二者択一的な決断が迫られてはいない。むしろ受洗後の信徒を「覚知」の域に導く上で前提となるような、キリスト教的「戒」を授けることが「知恵」の任務とされている。したがって、律法と知恵とが異なる位相に置かれ、「律法とは知恵の実りである」と理解されるのが正しい。このような理解に基づくなら、われわれは知恵を獲得することで律法をも十全に満たしうるという希望を拓くことができよう。クレメンスの理解を参照しつつ『シラ書』を読むとき、われわれは、教父たちが十字架上のキリストをむしろ内在させ、旧約的文化を聖化していったプロセスを見ることができる²⁷。そして、アレクサンドリアのクレメンスが『パイダゴゴス』の基層旋律とするのが『シラ書』であれば、『シラ書』における律法の理解は、パウロとは異なる次元に置かれるべきであろう。

6. パウロ『第1コリント書』における 十字架理解と『シラ書』の知恵

一方パウロは、エフェソから56年頃に送ったとされる『第1コリント書』第1章においてこう述べている。

「23) われわれは、十字架につけられたキリストを述べ伝える。それはユダヤ人にとっては躓きの石であり、異邦人にとっては愚かさである。24) だが招かれた者にとっては、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、キリストとは神の力であり神の知恵である」。

ここで第24節において「神の力であり神の知恵である」とされている「キリスト」とは、23節からのつながりで考えれば、言うまでもなく「十字架につけられたキリスト」ということになる。一方、やはりパウロの影響下にある文書の一つとされる『コロサイ書』1,20によれば、「神はキリストを通して、キリストにおいてすべてを和解させた。キリストの十字架上の血によって平和をもたらし、地上のものであろうと天上のものであろうと、そのすべてを和解させたのである」とされ、「十字架こそ、唯一の知恵である」²⁸とされる。

こうしてパウロにあっては、「十字架上のキリスト」と知恵とが同一視される。したがって知恵を授かるという状況は、「十字架上のキリスト」を身に帯びるということに他ならない。

ここで先に問題箇所として取り上げた『シラ書』の第24章に立ち戻ることにはしたい。知恵が「律法」と自らを同一視したという同章第23節に続く第25節以下には、つぎのように記されている。

「25) 律法は、ピション川のように、初物の季節のチグリス川のように、知恵であふれている。

26) 律法は、ユーフラテス川のように、収穫の季節のヨルダン川のように、理解力をあふれ出させる。

27) 律法は、光のように、ブドウを収穫する季節のギホン川のように、教訓を輝かせる」(シラ24,25 - 27)。

ここに名の挙がる諸々の川は、『創世記』第2章において「楽園」に流れるとされる河川である。

「2,10) 第一の川はピションで、金を産出するハビラ地方全域を巡っていた。…13) 第二の川の名はギホンで、クシュ地方全域を巡っていた。14) 第三の川の名はチグリスで、アシュルの東のほうを流れており、第四の川はユーフラテスであった」。

『創世記』のこの箇所にはチグリス、ユーフラテスなどメソポタミア地方の河川名が登場する。このことは、上でも触れたように『創世記』の冒頭部分がバビロン捕囚期に記されたということを物語っていよう。楽園とは、悲惨の只中にこそ見出されるべき場なのである。いずれにせよ『シラ書』の著者は、そのような真の楽園を成立させる根源的力として「知恵」を捉え、楽園を流れる川になぞらえられる「律法」に対し、そこに満ちるべき存在・実体として「知恵」を理解している。したがって「知恵」と「律法」とは異なった次元に置かれるべきものなのである。

先にパウロは、「十字架を身に帯びる」ないし「担う」というあり方に関して、それを「知恵」と呼んでいた。一方『シラ書』が前提としているのは、上で見たように、『創世記』に描かれる楽園を流れる諸々の川を満たし、楽園を成立させる力であった。このように「知恵」とは、共同体のために結界された上で措定される「楽園」を成立させ、それを絶えず潤す存在なのである。『シラ書』の末尾第50章に描かれる大祭司シモンは、ユダヤ人として律法に規定されたいけにえの儀礼共同体を形成する主長たる存在であった。ユダヤ人の先祖たち

で「知恵」を担った人々の系譜を辿る『シラ書』後半部（第44—50章）は、このシモンをもって締めくくられている。このことは、『シラ書』の著者が、「知恵」の具体的な体现方法をここに示したものに他ならないと言えるだろう。つまり、パウロらが「十字架を担う」と表現する状況は、おそらく『シラ書』にあっては「共同体として神の知恵を帯びる」という事態に他ならなかったのである。

結. 『シラ書』とクレメンスからの展望

本稿を閉じるにあたり、もう一度クレメンスにおける『シラ書』の引用に目を注いでみたい。前節に触れたように、『シラ書』から得られる「知恵」の像とは、「律法」と同一視される存在ではなく、むしろさらにその根底にあって、共同体のために結界され指定される「樂園」を成立させ、それを絶えず潤す存在であった。一方クレメンスの『パイダゴゴス』における『シラ書』からの引用は、すでにキリスト教に入信した信徒たちに対し、さらなる「覚悟」を備えた完成者を目指させるべく、日常生活上のこまごまとした規定と注意事項を記した箇所を多く含んでいた。それらの注意事項こそ、共同体のための「結界」の上で寄与する条項に他ならない。そして、『シラ書』において知恵が律法を潤したように、クレメンスの共同体において、それらの条項を満たさせるべく働くのが、この世に対しては死しつつも、復活を遂げて異次元の永遠に生き続ける十字架上のキリストであったことは言うまでもない²⁹。

冒頭に記したように、いわゆる「知恵文学」を構成する代表的な3作品に関しては、『箴言』『シラ書』『知恵の書』と、時代を経るにしたがって「知恵」概念が擬人化され、さらに「知恵」は「神の言葉」とも同一視されて新約思想への道筋を成していることが指摘される。その中にあって『シラ書』は、はっきりと「神の御言葉」として「知恵」を提起するには至っていないものの、律法とは自らを截然と区別し、律法主義に陥る弊を避けながら、律法の原段階としての「知恵」という観点を明確化し、その視点が神の創造行為にあって、またイスラエルの救済史においても、一貫して原点を形成するという段階を示す。その受容のあり方としては、パウロが『ガラテヤ書』などで見せるような「律法か、さもなくば信仰か」といった二者択一でラディカルな姿勢に沿う形ではなく、クレメンスが『パイダゴゴス』で見せるような、キリスト教徒のための道徳戒本としての扱いが相応しい。そしてこの扱いは、古ラテン語訳がそ

のテキスト伝承の次第において、幾多の書き入れを含みながらも、おそらくはヘブライ語原本の姿を内包しつつ伝えた、キリストへの「予型性」に適う捉え方と一致するものだと言えるだろう。

注

- 1 「新共同訳聖書」(1987年)では「旧約聖書続編」として、他の「第二正典」と併せてまとめられ、旧約聖書と新約聖書の間に収められている。
- 2 フランシスコ会聖書研究所訳注『格言の書』(中央出版社, 1983年), 6頁。
- 3 フランシスコ会聖書研究所訳注『シラ書』(中央出版社, 1980年), 6-7頁。
- 4 フランシスコ会聖書研究所訳注『知恵の書』(中央出版社, 1958年), 12頁。
- 5 L. ロスト『旧約外典儀典概説』(荒井猷・土岐健治共訳, 教文館, 1972年), 16頁。
- 6 プトレマイオス朝はI世ソテル(前323-285)に始まり, II世フィラデルフォス(前285-246), III世エウエルゲテス(前246-221), IV世フィロパトル(前221-205), V世エピファネス(前205-180)と続く。
- 7 セレウコス朝はI世ニカトル(前312-280)に始まり, つづいてアンティオコスI世ソテル(前280-261), 同II世テオス(前261-246), セレウコスII世カリニコス(前246-226), アンティオコスIII世メガス(前223-187)と継承される。
- 8 第1次シリア戦争(前274-271), 第2次シリア戦争(前260-253), 第3次シリア戦争(前246-241), 第4次シリア戦争(前219-217), 第1次シリア戦争(前202-198)。また, この間の経緯はユダヤ人史家ヨセフス(後37-100頃)の『ユダヤ古代誌』第12巻119-153節前後に詳しい。邦語文献による概説としては, 山我哲雄『聖書時代史 旧約篇』(岩波現代文庫, 2003年), 226-229頁参照。
- 9 *Ó- és Újszövetségi Szentírás: a Neovulgáta alapján*, Szent Jeromos Katolikus Bibliatársulat, Budapest 2004, 711.
- 10 フランシスコ会聖書研究所訳注『マカバイ記上・下』(中央出版社, 1963年), 270頁。
- 11 前掲注(3), 7頁。
- 12 この間の経緯については, P.K. マッカーター・ジュニア他『最新・古代イスラエル史』(池田・有馬訳, ミルトス, 1993年), 316-353頁。
- 13 cf. J. Ziegler(ed.), *Sapientia Iesu Filii Sirach*, 2., durchgesehene Auflage (*Septuaginta: Vetus Testamentum Graecum auctoritate Academiae Scientiarum Göttingensis editum*, vol. XII,2 *Sapientia Iesu Filii Sirach*), Göttingen, 1980, „Vorwort”.
- 14 アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』全3巻に関しては, 昨年度本学の紀要類に拙訳を掲載した。「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』(『訓導者』)第1巻—全訳—」, 筑波大学大学院人文社会科学研究所科芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』59, 1-62, 2011年, 「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』(『訓導者』)第2巻—全訳—」, 同『文藝言語研究 言語篇』59, 1-74, 2011年, 「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』(『訓導者』)第3巻—全訳—」, 筑波大学大学院人文社会科学研究所

- 科古典古代学研究室刊『古典古代学』第3号, 25 - 76, 2011年を参照。また『パイダゴゴス』をめぐる拙論としては、「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』研究—コルプスにおける位置づけをめぐる—」, 筑波大学大学院人文社会科学研究所人文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』46, 1-22, 2004年, 「アレクサンドリアのクレメンスにおける「訓導者」(paidagogos)の意義」, 教父研究会学会誌『パトリステイカー教父研究—』第9号, 112-127, 新世社, 2005年, 「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』による理想の教育者像—ヨハネ文書からの視点を基に—」, 筑波大学大学院国際地域研究専攻紀要『地域研究』32, 81 - 96, 2011年などを参照されたい。
- 15 前掲注(13)のツィーグララーによるテキストを, ラルフス編のセプトゥアギンタ (*Septuaginta: Id est Vetus Testamentum graece iuxta LXX interpretes*, edidit Alfred Rahlfs, Stuttgart 1935)と比較してみると, ラルフス版は, 随所で節番号が飛んでいることが判明する。ツィーグララーではそれらの箇所は小さな文字で印字されている。ツィーグララー版を便宜的に長ヴァージョン, ラルフス版を同じく短縮ヴァージョンと呼ぶことにする。
- 16 『パイダゴゴス』の第1巻および第2・3巻の間の関係については, 前掲注(14)の拙稿「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』研究—コルプスにおける位置づけをめぐる—」を参照されたい。
- 17 『シラ書』からの訳文は, 基本的に『新共同訳』に従い, 必要に応じてギリシア語テキストから拙訳した。クレメンスの引用が異文の場合もある。
- 18 H. クルーゼ『上智』(南窓社, 1982年), 188 - 193頁。
- 19 Schmatovich János, *Az Ószövetség üzenete: Teológiai áttekintés - Bibliai perspektíva*, Pannonhalma 1997, 188-189.
- 20 Rózsa Huba, *Az Ószövetség keletkezése: Bevezetés az Ószövetség könyveinek irodalom-és hagyománytörténetébe*, II. kötet, 3., javított kiadás, Budapest 2002, 374.
- 21 前掲注(5), ロスト16頁。
- 22 P. グルロ『聖書入門』(Z. イェール=河井田研朗共訳, 中央出版社, 1982年), 252および84頁を参照。
- 23 M.E. トーレス=アルビ『旧約聖書による霊性 モーシェ五書を読む』(南大路くに訳, 女子パウロ会, 1979年), 84頁。
- 24 トーレス=アルビ前掲書, 99頁。
- 25 律法の成文化・完成に関しては, 荒井章三『ユダヤ教の誕生 「一神教」成立の謎』(講談社, 1997年), 239頁。
- 26 パウロは56~57年にエフェソで『ガラテヤ書』を, 57~8年にコリントで『ローマ書』を記したとされる。フランシスコ会聖書研究所訳注『新約聖書』(中央出版社, 改訂版1984年), 「パウロ書簡の解説」(512 - 521頁)を参照。
- 27 この経緯に関しては, 拙著『教父と古典解釈—予型論の射程—』(創文社, 2001年), および『ハンガリーのギリシア・カトリック教会—伝承と展望—』(創文社, 2010年)を参照。
- 28 『聖書思想辞典』(X. レオン=デュフル編, 三省堂, 1973年)「十字架」, 412頁右欄。
- 29 この点に関しては, 前掲注(27)の拙著『ハンガリーのギリシア・カトリック教会』を参照。